

# 國學院大學學術情報リポジトリ

大文字・小文字の多重性：  
現代の英語表記を例にして

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-05<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: ニノ宮, 靖史, Ninomiya, Yasushi<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/00000025">https://doi.org/10.57529/00000025</a>   |

# 大文字・小文字の多重性

## —現代の英語表記を例にして—

二ノ宮靖史

### 1. はじめに

本稿では、現代の英語表記におけるローマン・アルファベット（以下アルファベット）の使用のうち、大文字と小文字に関して対照的に考察する。また、観点としては文字表記の多重性を採用する。本稿の構成は、まず現代の英語表記におけるアルファベットについて大文字と小文字の共通性を論じる。その後に大文字と小文字の機能を例示しつつ対照的に分析を行う。その結果をもとに大文字と小文字の関係性を明らかにし、最後にはその意義について文字論の視点から論じるとともに、今後の課題と展望を示す。

### 2. 大文字と小文字の多重性

#### 2.1 アルファベットによる現代の英語表記—大文字と小文字に共通する事項

アルファベットは26種の単音文字で構成される表記体系である。その起源はフェニキア文字であり、フェニキア文字>ギリシア文字>エトルリア文字>ローマン・アルファベット（ラテン文字）へと派生した<sup>(1)</sup>。アルファベットによる英語表記は7世紀ごろにアイルランド、イギリスで始まった<sup>(2)</sup>。当初は大文字のみで表記されていたが、10世紀後半にカロリング小文字体が大陸から伝えられてラテン語の書写に使われるようになった後、12世紀には英語でも大文字と小文字を区別するようになった<sup>(3)</sup>。現代の英語表記でも大文字と小文字を区別するが、これら二者は共通する体系性と異なる体系性の両方を持っている。まず本節では現代の英語をアルファベットで表記する際の大文字と小文字に共通する体系性について例を示しながら論じたい。

アルファベットは表音文字であり、その結果としてアルファベットによる英語表記は表音性・表音化という一次的性質を持っている。併せて、その表記法は表

語性・表語化という二次的性質を持っている。これらの典型的な例としては、“night”を“nite”と略式に綴ることがある。これは“night”の綴りのうち発音されない“gh”の部分が削除されているという点で英語の表音性・表音化の例であると同時に、略式に綴られた“nite”には表音的でない、すなわち発音されない“e”が添加されているという点で表語性・表語化の例でもある<sup>(4)</sup>。これは、音声は時を経て変化しやすいが、それに比べて文字は変化しにくいという音声と文字の性質がもたらした結果である。

また、アルファベットの語源はギリシア文字の最初の2字であるA (alpha) と B (beta) を続けて読んだことであるが、それが示す通り、アルファベットは最初の文字A ([ei]) から最後の文字Z ([zi:/zed]) まで個々の文字の順序が定まっていることもアルファベットの大文字と小文字に共通する事項である<sup>(5)</sup>。名簿や辞典など、項目を並べる際には大文字であっても小文字であっても順序は変わらない<sup>(6)</sup>。

さらに、語の綴り（あるいはそれによって表される音素、音節構造、形態）や語と語の配列（すなわち統合関係）も大文字・小文字で変わることはない。テレックス<sup>(7)</sup>や国際電報で大文字のみを用いて“CONGRATULATIONS ON YOUR PROMOTION.”と書いても、電子メールやSNSで小文字のみを用いて“congratulations on your promotion.”と書いても内容が変わらないのみならず、品詞も同じで語順が変わることもない。

それでは大文字と小文字の違いとは何であろうか。次節以降では「2.2 大文字の機能」「2.3 小文字の機能」として、大文字と小文字の体系性の違いを多重性として捉えながら現代の英語について類型としての機能を示し、それらの例を述べ、例に対する分析・考察を行いながら対照的に論じていく。

## 2.2 大文字の機能

アルファベットで現代の英語を表記するときに、大文字は文頭・固有名詞・固有形容詞の語頭、強調語句、標識・看板等の掲示物に用いられ、その役割は誤読防止、強意、注意喚起、当該語（句）を際立たせることなど、認識容易性を意図したものである<sup>(8)</sup>。それらを類型論的に分析すると、位置（文・語）に関して頭位、効果に関して強調・対比、表示に関して表語・表意、意味に関して指示・思想の四つの機能を見出すことができる。

大文字の使用が位置（文・語）に関して頭位であることの典型的な例は、上に述べた通り、文頭・固有名詞・固有形容詞の語頭では大文字を使用すること（capitalization）である。例えば、“A letter from Thomas Young about hieroglyphs is owned by the British Museum.”という文であれば、文頭の不定冠詞“A”、固有名詞（人名）の“Thomas Young”、固有形容詞であり、この文では固有名詞の一部でもある“British”、固有名詞の一部である“Museum”ではそれぞれ語頭が大

文字で記される。また、飛行機内の表示では、“Do Not Remove Life Vest Except In Emergency”のように、すべての語頭が大文字で記されている場合がある。その他には、複合語で2箇所到大文字を使用すること (bicapitalization) の有無においても位置に関して頭位であることがわかる。典型的な例としては、人名において“McArthur”、“McKinsey”などのように頭位ではbicapitalizationが行われるが、“Johnson”のように非頭位では行われない。これらは語頭あるいはそれに準ずる位置で大文字を用いることで文の開始、名詞や形容詞への固有性付加の目印とする表記法である。

大文字は効果に対して強調・対比の機能を持っている。上述の強調語句、標識・看板等では強意、注意喚起、当該語(句)を際立たせることなどが意図される。例えば、イギリスに行く交通標識の「止まれ」は“STOP”、救急車の車体には“AMBULANCE”、警察車両には“POLICE”のように大文字のみで記されているのを見かける。これらは注意喚起の典型例である。国際郵便を出す際にも“TOKYO”、“LONDON”、“JAPAN”、“UNITED KINGDOM”のように都市名と国名は大文字で書くようにとの案内がある<sup>(9)</sup>。また、英語で姓名を表記する際には“SNYDER, Gary”のように姓の部分をすべて大文字で記すことによって名と対比させることがある。さらに、飛行機の乗客名簿には姓名がどちらも大文字で表記され、旅券には氏名や国籍など、数字以外の個人情報すべてが大文字で書かれている<sup>(10)</sup>。これらは文字を区別しやすいという認識容易性の例であるとともに大文字の使用が相対的であることを示している。大文字使用の相対性は、前述の飛行機内での表示からも読み取ることができる。筆者が本稿を執筆中に搭乗した飛行機内の英語表記は、非常口の表示が“EXIT”、非常扉を開けるレバーは“OPEN”とすべて大文字であった。一方で座席には“Life Vest Under Your Seat”のように語頭が大文字で書かれていた。あるいは安全のしおりを見ると“SAFETY INSTRUCTIONS”、安全のしおりを機内から持ち出さない旨の表示は“DO NOT REMOVE FROM AIRCRAFT.”とすべて大文字で書かれていたが、禁止事項 (“Prohibited at All Times”) 等の各項目は語頭のみ大文字 (前置詞や接続詞のような機能語は小文字)、“For details, please refer to the in-flight magazine.”のような付帯的な事項は通常の文を書く際の大文字・小文字の使い方であった。これらの指示・案内の書き方を対照的に分析すると、通常の表記より語頭を大文字で表記する方がより重要度が高く、すべて大文字での表記は語頭を大文字で表記するよりもさらに重要度が高いことが読み取れる。

大文字が表示に関して表語・表意の機能を持っていることは、代名詞の“I”によって典型的に例示することができる。小文字の“i”ではなく大文字の“I”を用いることで、その語が表音文字によって記されているにもかかわらず音以外の情報を持っていることがわかる。具体的には人称は一人称、数は単数、品詞は代名詞であることなどを示している。このような表語・表意の機能は頭字語 (acronym)

においてさらに顕著であり、個々の文字は音のみを表しているが、語全体として一つの意味をなしており固有名詞化・表意化が行われる。例えば、UFO、FBIの頭字語は、元の意味と直接のつながりを見出さなくともその能記を思い出すことができる<sup>(11)</sup>。特にUFOは、*OALD* (*Oxford Advanced Learner's Dictionary*)では“the abbreviation for ‘Unidentified Flying Object’ (a strange object that some people claim to have seen in the sky and believe is a spacecraft from another planet)”と定義されているが<sup>(12)</sup>、もしUFOを「他の惑星からの宇宙船」と解釈する人がいれば、それは原義とは違うものとして認識されることになり、これもまた頭字語の表語性を示す例である。その他の例としては、英語にはマンガのセリフを大文字のみで表記する習慣があるが、絵とセリフが一体になって提示されており、これもまた表意・表語として考えることができるだろう。

大文字が意味に関して持つ指示・思想は、固有名詞の語頭に大文字を使うこと (capitalization) を例に考えることができる。英語では、一神教の「神」は“God”、代名詞で置き換える際にも“Thou”と語頭を大文字にする。それに対して多神教の神は大文字を使わず小文字のみで“god”と綴る。さらに、キリスト教の「悪魔」は“the Devil”、“Satan”のように語頭を大文字にする。これは大文字が意味に関して指示と思想の機能を持っていることを表しており、“God”を絶対者、唯一の存在者として、“the Devil”、“Satan”を強力な存在として捉えていることを示している。

大文字については、その一種である小型英大文字 (small capital) についても補足しておきたい。小型英大文字は形が大文字で高さは小文字と同じ書体である。例としてはCopperplate GothicやEngraversのように、活字として作られたが後にコンピュータ上のフォントとしても使われているものがある。小型英大文字は文章の中でパラグラフの最初の1語、数語、1行を強調する場合、あるいは書名や著者名などにも大文字として使用される<sup>(13)</sup>。これらのことからわかるのは、大文字と小文字の区別は大きさではなく形の差異によることである<sup>(14)</sup>。

以上のようにアルファベットによる英語表記における大文字の役割を考えていくと、上述のそれぞれの機能は「有標/無標」の表れと考えることができる。すなわち大文字が有標であり、小文字が無標である。その「有標/無標」という性質が頭位、強調・対比、表語・表意、指示・思想という具体的な機能として表出しているのである。

### 2.3 小文字の機能

前節では大文字の機能について論じたが、本節ではそれに対する小文字の機能について考える。大文字に対する小文字の機能は、位置に関しては非頭位、効果に関しては非強調・非対比、表示に関しては表音、意味に関しては非指示・非思想である。

大文字と対比させて考えれば、小文字が位置（文・語）に関して非頭位であることは、文頭・固有名詞・固有形容詞の語頭以外で小文字を用いることを意味する。これは小文字が無標であり、それに対して大文字が有標であることを示す。言い換えれば、小文字の役割は大文字が有標性を表すための前提であり。その後には相対的な関係性がある。

小文字は、効果に関しては非強調・非対比である。文学の例としては、詩人であるE.E.カミングズの名前はしばしば小文字のみで表記され（e.e. cummings）、彼の詩は基本的には小文字で書かれており、大文字は不規則的に使用されるのみである<sup>(15)</sup>。また、カミングズの表記法における非強調・非対比の典型的な例は、一人称単数代名詞“I”が小文字（“i”）で記されることである。これらは大文字の有標性（自己主張）が剥奪されて小文字になると解釈することができる<sup>(16)</sup>。その他にも、小文字の使用についてCNNのウェブサイトに掲載された記事「米海軍、全文『大文字』の通信文書廃止へ コスト削減などで」には「全文大文字の通信文書は『怒鳴られる』ような印象を乗組員に与えていたともされ、この不評の解消にもつながる」との記述がある<sup>(17)</sup>。同記事によれば、全文大文字の慣行は小文字のキーがなかったテレタイプ機器が使われた1850年代にさかのぼることだが、「『怒鳴られる』ような印象」は大文字の使用に対する英語話者の意識の一例である。これは、小文字が非強調・非対比の機能を持つ理由の一つになり得る。また、同じニュースについてBBCのウェブサイト上の記事“US Navy ends dependence on capitalised communications”では“‘The US Navy has made up its mind that not everything is a crisis and some messages are just normal,’ Michael Clarke, director of the Royal United Services Institute think tank in London, told the BBC.”との論評を紹介している<sup>(18)</sup>。これは、「大文字／小文字」が「crisis／normal」と対応するという意味で、大文字が緊急時の電文で小文字に対して強調・対比され、小文字が大文字に対して非強調・非対比である具体例として解釈することができる。インターネット上ですべての文字を大文字で書くことを“shout”と表現するもの<sup>(19)</sup>、小文字が無標性ゆえだろう。この“shout”には「（警察・救急関係者の）緊急（無線）連絡」という俗語としての意味もある<sup>(20)</sup>。これもまた大文字が緊急連絡に用いられるという意識と共通していると考えられる。

小文字が表示に関して表音であることは、電子メールやSNS等、インターネットにおける英語表記にその例を見つけることができる。これらの通信手段を用いる際にはしばしば小文字のみでの表記が行われる。“hope u r doing well.”のような表記がその一例であるが、小文字のみで、なおかつ綴りが省略されている。理由としてはキーボード上で大文字ヘシフトを切り替えるのを省略して入力の上を上げるのが考えられるが、その際に大文字を用いないのは、小文字の方が音声言語に近いという意識があるからではないだろうか。

小文字が意味に関して非指示・非思想であることは、前節で述べたcapitalization

について「大文字を語頭に使用しない」という視点からさらに検討することによってより明確になる。具体的には名詞における「固有／普通」の違いである。例としては、“Japan”（日本）は固有名詞であり、“japan”（漆）は普通名詞であるという違いは語頭が大文字であるか小文字であるかによって表される。また、前節で「効果に対する強調・対比の機能」の例として姓名表記の姓の部分すべて大文字にする表記法について検討したが、数学的な考え方をすれば、これは姓が集合であることをすべて大文字によって記すことで表し、名が元であることをそうしないことによって表していると捉えることができる。

以上のように小文字の役割は無標であり、それは有標である大文字との相対的關係によって成り立っている。歴史的には大文字より後に成立した小文字が無標の特徴を得たのである。

## 2.4 まとめ

本節ではアルファベットによる現代の英語表記について大文字と小文字の共通性と大文字の機能、小文字の機能について例示するとともに考察を行った。その結論としては、「大文字／小文字」という表記上の対立・対応が「頭位／非頭位」「強調・対比／非強調・非対比」「表語・表意／表音」「指示・思想／非指示・非思想」という対立・対応として機能していると述べることができる。これらをより抽象的にまとめれば、「有標／無標」という相対的な違いである。これは「有標／無標」の差異が大文字と小文字の多重性であることを示している。表記体系の多重性は、文字表記を研究し、文字論を構築する際の基本的な概念の一つとして重要な役割を果たすだろう。

## 3. おわりに

### 3.1 英語表記の観点から

本稿では現代の英語表記を例にアルファベットの大文字と小文字の多重性について例示と考察を行った。その結果、「大文字／小文字」の多重性は「有標／無標」によって捉えられることが示された。この「有標／無標」の差異は、文字を書くという点からは「頭位／非頭位」「強調・対比／非強調・非対比」「表語・表意／表音」「指示・思想／非指示・非思想」という具体的な概念として現れ、実際の表記が行われるというプロセスとしてモデル化することができるだろう。文字を読むという点からは、逆のプロセスとして考えることができる。以上の帰結をふまえていくつかの課題と展望について考えてみたい。

本稿では大文字と小文字の機能を類型論的に提示したが、個々の事例は特性論的に捉えることも可能である。前述の姓名の表記で姓全体と名の語頭を大文字で表記することは頭位、強調・対比、表語・表意、指示・思想のどれにも当てはま

る。また、飛行機内の表示も同様である。その他にも、英語の一人称単数名詞“I”が大文字で表記されることは、他言語の体系であるドイツ語の敬称“Sie”、イタリア語の敬称“Lei”の語頭大文字表記と対照的に分析・考察することで、より多くのことが明らかになるだろう<sup>(21)</sup>。このような捉え方によって、文字表記をより詳細かつ理論的に分析することが可能になる。

大文字は強調・対比の機能を持っているが、その他にも強調・対比を示す表記法がある。現代の英語表記における強調には大文字の他に斜字体 (*italics*)・引用符 (“quotation mark”)・太字 (**bold**) があるが、これらの違いを示すことによって強調の下位区分・対比が可能になる。これは英語の表記という体系性の中でさらに新しい知見として追究が可能である。

併せて本稿では大文字と小文字の体系性の異なりが多重性を持っていることを示したが、それを組み合わせの形でさらに検討することにより、多重性をより詳細に捉えることが可能になる。アルファベットによる表記の場合、「大文字のみ／大文字+小文字／小文字のみ」という三つの表記方法が考えられる。大文字のみの表記は、表記の単純化であると同時に強調、大文字+小文字の表記は、表記の複雑化であるとともに大文字が有標で小文字が無標、小文字のみは、表記の単純化と非強調という性質を持つ。これらは相対的な性質であり、どのような表記をするか、特に大文字+小文字で表記をする場合にどの文字を大文字にする／しないは表記の単純化と複雑化のダイナミズムによって決定されるだろう<sup>(22)</sup>。本稿「2.3 小文字の機能」では、米海軍が全文で大文字を用いる通信を廃止する記事を紹介したが、かつてテレタイプで大文字のみが使われていたときには、技術的な理由により字種を制限するために大文字と小文字のどちらかを選ぶ必要があったと思われる。その際に大文字を選んだのは大文字が有標であるからだと推定できる。現在でもモース符号の一覧表は文字の部分が大文字で示されているが、それも同様の理由からだろう。航空機の飛行計画に用いる文字はアルファベットの太文字と定められているが<sup>(23)</sup>、これもまた大文字の有標性が強調・対比（より具体的には認識容易性）として機能している。タイプライターやパソコンのキーには、小文字が入力のデフォルトとして設計されているにもかかわらず大文字が記されていることも強調・対比のためだろう。「2.3 小文字の機能」では電子メールやSNSで小文字のみを使用することも紹介したが、小文字の無標性が音声言語や略式の表記に近いと捉えられたのではないだろうか。

さらに、大文字と小文字の相対性をより発展的に捉える可能性についても論ずる価値があるだろう。インターネット通信販売サイトであるAmazon.com, Inc.のロゴは“amazon.com”のように小文字のみでデザインされている<sup>(24)</sup>。また、スポーツ用品メーカーであるadidasはドイツの企業であるが、ウェブサイト上で英語を用いたキャッチコピーとして“energy made endless”のような小文字のみの表記や“4ever”のような表音と小文字を組み合わせた表記をしている<sup>(25)</sup>。このような

非大文字の表記<sup>(26)</sup>は、大文字よりもさらに有標であるものとして用いられているのではないだろうか。つまり、既に有標であるものよりもさらに有標であることを示すために、全くの無標に戻り、それが有標になるのである。すると、一つの概念が「無標>有標>無標…」あるいは「無標>有標>無標+*a*…」と変化していくサイクルを仮説として提示できる。このようなサイクルは、大母音推移のような音変化やその他の言語現象について考察する際の手がかりになるのではないだろうか<sup>(27)</sup>。

### 3.2 一般言語学的な観点から

アルファベットの成立は、歴史的には大文字が先で小文字が後であり、小文字が大文字に対して無標の文字体系として機能している。その結果、大文字は何かを他から区別するはたらきを持つようになった。具体的には頭位における固有性(固有名詞など)、効果に関して強調・対比、表示に関して表語・表意、意味に関して指示・思想である。これらは何かを際立たせる機能であるが、強さ・高さ・長さのような卓立という点で音声との接点がありそうである。音声において、強さ・高さ・長さという有標性が後から追加される場合と、いったん弱く発音してそれを元に戻すことによって際立たせる場合が考えられるが、後者は大文字・小文字が成立した順序と共通の性質を持っているのではないかと考えられる。

大文字と小文字という区別がどれだけ普遍的かを検討することも一般言語学の点から興味深い。ギリシア文字には大文字と小文字があり、それから派生したアルファベット、キリル文字にもその区別がある。パフラヴィイ文字からギリシア語の影響を伴って派生したという説のあるアルメニア文字にも大文字／小文字があるが<sup>(28)</sup>、グルジア語でかつて使われておりギリシア語から派生した説<sup>(29)</sup>のあるフツリ文字は大文字／小文字を区別する。それに対して、現在グルジア語の表記に使われている文字であるムヘドゥルリ文字にはその区別はない。また、フェニキア文字やアラム文字、ヘブライ文字には大文字／小文字の区別はない。以上は表音文字の例だが、表意文字の場合は、日本語の漢字仮名交じり表記で漢字／仮名が多重性を持っており、大文字／小文字の多重性と比較・対照が可能だろう。これらのことを併せて考えると、大文字／小文字の区別がアルファベットに特有か、印欧語に特有か、表音文字に共通か、諸言語に共通の性質かといった検討が可能である。

類型論的に考えれば、大文字使用は語の中の位置によって文字の形を変えることと相補的である。例えば、欧州のいくつかの言語(英語、ドイツ語など)にはかつて「長い*s*」と「短い*s*(字形は*f*)」の区別があった。また、ギリシア語にはシグマに語末文字(*ς*)がある。ヘブライ語には「ソフィート」と総称される語末文字が5種類(*ק*: カフ・ソフィート、*מ*: メム・ソフィート、*ל*: ヌン・ソフィート、*נ*: ペー・ソフィート、*ך*: ツァディー・ソフィート)がある。アラビア語に

は文字のカテゴリとして単独形・頭字・中字・尾字の4種がある。これらの例から、大文字を使用する言語では、位置によって文字の形を変えることが少なく、大文字／小文字の区別のない言語ではそれが多くなる傾向があるという仮説を提示できる。語末文字や頭字・中字・尾字は、位置を示す対比という機能を持っており、大文字は同じ機能を包含している。特に、ギリシア語には語末文字が1種類、ヘブライ語には5種類あることは、大文字があれば語末文字は少なくなることを意味する可能性がある。

### 3.3 記号的使用の観点から

アルファベットにおける大文字／小文字の機能・役割については、記号的使用の観点からも検討することができる。

学校では評価の記号としてA・B・Cを用いる場合があるが、小文字ではなく大文字で書く。企業や金融商品の信用等级付けではA・B・C以外にもAAA、Aaaなどの記号を用いるが、すべて大文字あるいは語頭は大文字で表示する。これらは大文字が持つ強調・対比の機能の例である。

数学の分野では、自然数 (N)、整数 (Z)、有理数 (Q)、実数 (R)、複素数 (C) といった特定の集合を表す記号には大文字を用いる。行列は大文字で、その要素は小文字で記される。図形では点を大文字で、線を小文字で表す。論理学では述語記号は大文字で、変数記号・関数記号は小文字で示す。また、化学の分野では、元素記号は1文字目が大文字で2文字目が小文字である。これらのことから導き出されるのは、大文字のみ、あるいは大文字で始まる記号は上位概念としての定義域を表し、小文字の記号は下位区分として値を表すことである。

天文学の分野では、太陽系外の恒星・惑星の命名に、“Lupus-TR-3b”のように<sup>(30)</sup>、恒星は語頭を大文字、あるいは語全体を大文字で表記し (“Lupus-TR”)、惑星には小文字 (“b”) を記号として用いる慣習がある (一部例外を除く)<sup>(31)</sup>。これもまた対比であり、恒星と惑星の階層構造を示している。

以上のようにアルファベットの記号的使用について個別言語とは別の視点で考察することは、アルファベットの普遍的な性質を明らかにするのに資するだろう。これについてはさらに詳細な分析・考察が必要である。

### 3.4 今後の展望

本章では英語表記、一般言語学、記号的使用の三つの観点から課題と展望について述べてきたが、表記体系の多重性という枠組みを設定することで、具体的な言語現象を説明し、そのメカニズムや意義を明らかにし、さらに論理的可能性としての仮説を提示することができた。今後は、文字表記の多重性という観点を文字論の中で位置付けることによって、研究の対象・方法をさらに精緻に設定し、有益な研究の方法論を構築していく体制を整えることが可能になる。このことに

ついでさらなる追究は、今後の研究の課題としたい。

#### 注

- (1) マン (2004: 320-321)
- (2) 市川 (1953: 57)
- (3) 大塚・中島 (1983: 388)
- (4) ニノ宮 (2011: 82-83)
- (5) 文字体系の順序には、アルファベットの他にも表音文字では「アイブペーナ (アルメニア文字)」「いろは (日本語の仮名)」といったものがある。表意文字では漢字の十干 (甲乙丙丁…) 十二支 (子丑寅卯…) などがある。文字体系の順序は文字論の観点から興味深い項目である。
- (6) 英和辞典や英々辞典では、大文字と小文字のどちらを先にするかに若干違いがある。例えば、字母としての“A”と“a”、あるいはChina (中国) とchina (磁器) のように同じ綴りで固有名詞と一般名詞が語頭の大きい文字／小文字の表記によって区別される語について、大文字で始まる方と小文字で始まる方のどちらを先にするかは、辞典により扱いが違う場合がある。歴史的には大文字が先で小文字は後に考案されたものであるから順序としては大文字が先という考え方が可能であるが、同時に、次節以降で述べる「有標／無標」という対立・対応から考えると小文字が先という考え方もまた意味があるだろう。
- (7) 現在でもテレックスのサービスはSwissTelex SA(<http://www.swisstelex.com/>)やEasyLink (<http://www.easylink.com/>)のような通信事業者によって提供されているので、念のため記しておく (2014年8月現在)。
- (8) ニノ宮 (2011: 85-86)
- (9) <http://www.postoffice.co.uk/how-to-address-mail>
- (10) ただし署名欄はその限りではない。
- (11) ニノ宮 (2009: 86)
- (12) <http://www.oxfordlearnersdictionaries.com/definition/english/ufo>
- (13) 後述するBayliss et al. (2009)の著者名と掲載誌名は小型英大文字が使用されているので、必要に応じてここで参照されたい。
- (14) この差異は定冠詞“the”の発音と対応していると捉えることができる。定冠詞“the”の発音は、通常は[ðə]、母音の前では[ði]、強調する場合には[ði:]であるが、これら三者の差異は音価・音質であり、長さではない。この音価・音質の違いは大文字の強調と重なる部分があり、文字と音の平行的な関係を示しているのではないだろうか。さらにこの差異は英語の音声における[i]と[i:]、[o]と[u:]の違いとも関係すると考えられる。すなわち、短母音と長母音は、長さよりも音質の方が一次的ではないかという意味である。
- (15) Encyclopaedia Britannica <<http://global.britannica.com/EBchecked/topic/146466/EE-Cummings>>
- (16) 一方、is 5という詩の中で、カミングズは“nearerandnearerandNEARER”のように大文字を用いている。向山 (2008: 98)はこれを「近さを表す言葉の比較級が3つ一体化し、最後の『近さ』が大文字化し、『私達』の目の前に『近さ』が現前している」と評している。
- (17) <http://www.cnn.com/cj/usa/35033460.html>
- (18) <http://www.bbc.com/news/technology-22892166>
- (19) 瀬戸・投野 (2012: 1810)
- (20) 松田 (2000: 1994: 2325)

- (21) “Sie”と“Lei”は三人称女性の代名詞の語頭を大文字にしたという共通の特徴を持っている。これも体系の多重性という観点から考察が可能だろう。
- (22) 文字表記における複雑化と単純化については、詳しくは二ノ宮(2014)を参照されたい。
- (23) 航空局交通管制部運用課長 (2013: 4)
- (24) <http://www.amazon.com/>
- (25) <http://www.adidas.de/>
- (26) 現代の英語を表記する文字体系の中では、アラビア数字は小文字として機能していると考えられる。アラビア数字が文頭には置かれないことと人名には使われないことが主な理由である。後者の例としては、“Edward VIII”と表記するが、“Edward 8”とは表記しない。ちなみに日本語では「エドワード八世」「エドワード8世」あるいは「エリザベスII世」の表記は見かけるが、「エドワードVIII世」という表記を筆者は見たことがない。これについては機会を改めて研究を行いたい。
- (27) さらにこのサイクルは言語以外にも、かつて流行した服装が時代を経て再び流行するというような社会的現象の説明を試みる際にも一般的な仮説として設定することが可能ではないかと思われる。
- (28) Encyclopaedia Britannica <<http://global.britannica.com/EBchecked/topic/35281/Armenian-alphabet>>
- (29) Encyclopaedia Britannica <<http://global.britannica.com/EBchecked/topic/230307/Georgian-language#ref272738>>
- (30) Bayliss et al. (2009: 4368)
- (31) 惑星に対する記号の付与はaを使わずにbから始める。これもまた大文字と小文字の階層性という点で興味深い。

### 参考文献

- adidas <<http://www.adidas.de/>> (2014年8月27日アクセス).
- Amazon.com <<http://www.amazon.com/>> (2014年8月27日アクセス).
- Bayliss et al. (2009) “The Lupus transit survey for hot Jupiters: results and lessons” *Astronomical Journal* Vol. 137, No. 5 The American Astronomical Society pp. 4368-4376.
- BBC (2013) “US Navy ends dependence on capitalised communications” <<http://www.bbc.com/news/technology-22892166>> (2014年8月27日アクセス).
- CNN (2013) 「米海軍、全文「大文字」の通信文書廃止へ コスト削減などで」 <<http://www.cnn.co.jp/usa/35033460.html>> (2014年8月27日アクセス).
- Encyclopaedia Britannica <<http://http://www.britannica.com/>> (2014年8月27日アクセス).
- 市河三喜編 (1953) 『研究社英語学辞典』研究社.
- 航空局交通管制部運用課長 (2013) 「飛行計画記入・通報要領」 <<http://www.mlit.go.jp/common/001018490.pdf>> (2014年8月27日アクセス).
- マン, ジョン (2004) 『人類最高の発明アルファベット』晶文社.
- 松田徳一郎監修 (1994) 『リーダーズ・プラス』研究社.
- 向山守 (2008) 「カミングズの反戦詩—*is 5*から—」『静岡福祉大学紀要』第4号 静岡福祉大学, pp. 97-104.
- 二ノ宮靖史 (2009) 「ローマ字から文字論へ—俯瞰的考察の試み」『言語の世界』Vol. 27, No. 1/2 言語研究学会, pp 73-89.
- . (2011) 「英語の綴り字と音標文字の補完的共存」『言語の世界』Vol.29, No. 1/2 言語研究学会, pp. 79-86.

---. (2014) 「文字表記における対人適応の原理付けと諸現象」『言語の世界』 Vol. 32, No. 1 言語研究学会, pp. 81-98.

大塚高信・中島文雄監修 (1983) 『新英語学辞典』 研究社.

Oxford Learner's Dictionaries <<http://www.oxfordlearnersdictionaries.com/>> (2014年8月27日アクセス).

Post Office “How to Address Mail” <<http://www.postoffice.co.uk/how-to-address-mail>> (2014年8月27日アクセス).

瀬戸賢一・投野由紀夫編 (2012) 『プログレッシブ英和中辞典』 第5版 小学館.

安岡孝一 (2010) 「コンピュータ端末の元祖になった電信機「テレタイプ」(〈特別小特集〉あの技術は今)」『電子情報通信学会誌』 Vol. 93, No. 1 一般社団法人電子情報通信学会, pp. 12-16.